

臨床工学科この一年

臨床工学科係長 大谷 靖之

平成18年も皆様のご協力を得て、大過なく業務を行うことが出来ましたことに、この場をお借りしてお礼申し上げます。

1. 血液浄化業務

平成18年の透析件数は10,652件で、昨年より約600件増加しました。一方、工学科が病棟で行う血液浄化業務は昨年より38件減の115件でした。病棟血液浄化の最近の特徴として、敗血症時に行う血液吸着（エンドトキシン吸着）が多くなってきています。

これは、症例そのものが増加したのではなく、早期かつ積極的な治療により救命を目指す大勢の現れではないかと思えます。

この治療に用いる専用の吸着筒は1本365,000円すること、敗血症が進行してしまうとほとんど救命できないことから、適応（使用）に躊躇することがほとんどであったと思えます。しかし最近では持続緩除式血液濾過（CHF）との組み合わせで、長時間の吸着を行い治療するスタイルが徐々にではありますが、定着しつつあります。ICUで患者管理が行われると、このような治療も増加すると思われれます。

透析室では、専用のシステムで体重計と装置をネットワーク化し、体重測定・除水計算とその値の自動入力・個々のデータ管理を目指したいと思えます。

2. 機器管理業務

当科管理対象機器に対して行われた保守は昨年引き続きさらに約130件少ない905件でした。輸液ポンプの廃棄に伴う定期点検減等が保守件数減につながったと思われれます。また、機器センターに返却された機器や院内の様々な機器への対応件数は昨年と同数の8,120件でした。

今年は、4階西病棟のテレメーター心電図の更新に際し、メーカーのプレゼンやデモを実施するとともに、将来的な展望（機種統一など）も検討し導入に至りました。今後は必要に応じて、このような形で機器選定を行っていきたいと思えます。

3. 手術室業務

人工心肺は昨年より12例多い41例で胸部大動脈瘤に対する症例が18例と一番多く、ついで弁置換・形成、CABG(on pump beating)の順でした。41例の体外循環症例は工学科になって以来、最大の症例数でした。

腹腔・胸腔鏡下手術は昨年より微増の220件、眼科関連（PEA等）は31件増の305件ですが、他業務との兼ね合いから手術室スタッフやメーカーにお願いし、業務を代行して頂いていますので、全てを当科が担当した訳ではありません。鏡視下装置の更新に伴いこの業務の扱いを今後、手術室と検討していきたいと思えます。

4. 心カテ業務

2006年一年間で、昨年の倍近い272件の検査、77例のPCI（カテ検査後PCIなど重複カウントあり）が行われました。また、心臓電気生理学的検査（EPS）実施に伴いその装置の操作および検査の目的等を学び、なんとかひとり立ち（メーカーさんが居なくても）できるようにまできました（モニターの波形や記録から何かわかるか？と言えば、嫌な汗をかいてしまいますが・・・）。

昨年の「この一年」にも書きましたが、検査日と人工心肺症例、腹腔鏡下手術や病棟血液浄化が重なる場合は、多忙を極めます。この場合、関係部署のスタッフに助けをもらいながらの業務となりますが、平成20年4月からは業者（メーカー・代理店）立会いに関する法律が施行され、現行のように様々な治療場面で無制限に業者が関われなくなります。

業務の一部をサポートして頂いている当科では、このままでは平成20年以降、現行の業務量を行うことは困難となるため、増員を強くお願いしているところです。加えて、技士でなければならぬ業務に特化するなどの対応も必要になると考えます。

5. その他

集中治療室（ICU）の開設に向けて病院全体での協議が進んでいますが、当科の更なる技術提供の場となるのは必然と考えており、設計段階から参加しています（最初は蚊帳の外だったので、不満半分いじけ半分でしたが・・・）。

今後は、今回4西病棟のモニター更新時に学んだことを生かし、ICUモニターに関しても主要診療科と協議し、機種だけでなく設置や使用レイアウトを考えて行きたいと思えます。また、時期的なものが許せば工学科として他施設のICUをハード、ソフトの両観点から見学し、計画に資したいとも考えております。